鮮やかに色づいた銀杏並木に囲まれた秩父宮ラグビーでは今年も伝統の早明ラグビー。曇り空で北西の微風の下、明治大学校友会市川地域支部の初老の男達は、緑の芝生に舞う紫紺と白のジャージーを纏った若武者の姿に酔いました。日本の伝統文化のなかで、白い色には常に何かへの緊張感が秘められています。和服の白足袋には常に死を意識していた武士の嗜みを感じることがあります。

今年もワン・トライで逆転可能な 4 点差で明治は敗戦。しかし、明治大学ラグビーの「愚直さのなかに英知を秘めた謙虚さ」はスタンドを多いに沸かせました。多くの人は、二律背反が数多く生じる日常に抗して伝統文化を支える庶民の姿を感じていました。そこには、論理だけでは制御できない現実に抗して、知識が示す方向と他者との共生とのバランスを支える姿がありました。

試合後半では、連続して 2 トライ（14 点）を取られ、18 点差になりました。これは、明治のタックルの甘さと早稲田のバックスの切れ味の結果でした。この得点が試合の結果を決定しました。後半の残り試合時間が 10 分を切ってから点差は、ラグビーでは挽回困難な 2 桁の 18 点。しかし、そこから明治はツー・トライ（含ゴール）を重ねて 4 点差にしました。この明治の連続攻撃は観客に大きな感動を与えました。そこにはラグビーの原点「謙虚な貢献を目立たぬように」がありました。

それでも 1980 年代からの大衆社会状況の進展は、ラグビー選手の意識をも変化させました。ラグビーの試合では理性の限界と他者との協調を常に思い、レフリーの判断を疑うことはありません。ラグビーの試合では、他のスポーツで生じるレフリーへの抗議は皆無です。しかし、世の中の推移と共に競技者の精神にも変化が生じました。トライ後のガッツ・ポーズの増加は、ラグビーの高度な精神の行方に暗雲を投げかけています。

明治大学のラグビーの「前へ」は、愚直さのなかに英知を秘めて謙虚に歩む姿勢を象徴しています。その姿勢には、人間社会の歴史的宿命と言うべき民法典論争（時代を先取りした思想が官僚中心の権力に敗北）と共通するものがあります。紫紺と白のジャージーの明治大学のラグビーは、建学以来の精神と重ねて精神の自由の原点として継承すべきものと考えます。

一世紀に渡る早明ラグビーの歴史を紐解くと、第一回目は 1923 年（大正 12）12 月 24 日（この試合は明治大学ラグビー創設後の第 2 戦、初戦は慶応大学）。1926 年（昭和元年）から 12 月最初の日曜日に開催。1973 年から国立競技場で実施（これ以降秩父宮ラグビー場に移るまで毎年 5 万人前後の観客）、なかでも 1982 年の 67000 人の観客は国立競技場の入場者数の最高記録。NHK ではテレビ放送開始後から早明ラグビーを毎年全国放送。

早明ラグビーは、勝敗を超えて両校が高潔な精神を競い合う姿に世間の人は高いレベルの感動を与えてきました。

2018 年 12 月